

*Requiem for a Nun*の語り手の特異性

— Faulknerの引用符と時制の用法が明らかにすること —

The Distinctive Characteristics of the Narrator in *Requiem for a Nun* as Revealed through Faulkner's Use of Quotation Marks and Tenses

重 迫 和 美

SHIGESAKO Kazumi

キーワード：英米文学講読・William Faulkner・*Requiem for a Nun*・Narrative Structure・Narrator

序論 *Requiem for a Nun*の語り手の問題点と用語の定義

William Faulknerはモダニズム文学の実験的語りの技法で知られる。ただし、彼の語りの技法研究は1930年代を中心とする主要期作品に集中しており、1940年代後半以降の後期作品はあまり注目されていない。*The Sound and the Fury* (1929)を始めとする主要期作品に内的独白や意識の流れなどの斬新な一人称の語り手が頻繁に用いられたのに対し、*Intruder in the Dust* (1948)以降の後期作品では三人称の語り手を中心となる。James Joyceら語りの技法の改革者たちが伝統的な全知の三人称の語り手よりも視点が個人に限定される一人称の語り手を実験的に利用したことから、その特徴が顕著には見られない後期のFaulkner作品は実験味に乏しいとされたのである。

しかし、私の考えでは、後期においてもFaulknerは語りの技法の実験を継続した。そもそも、彼が三人称の語り手を廃そうとし、一人称の語り手による大胆な実験を行なったのは事実ではあるが¹、その当時であっても彼が三人称の語り手を完全に手放すことはなかった。三人称か一人称かという単純な問題ではなく、全作を通してFaulkner的なのは、平石貴樹が「三人称の一人称化」や「一人称の三人称化」という表現で表すような(94)、三人称と一人称の両者の混交物のような奇妙な語り手である。さらに言えば、後期作品には主要期作品には見られなかった独特の三人称の語り手が使われている。

本論は、Faulkner後期作品における三人称の語り手の特異性を示す一例として、*Requiem for a Nun* (1951)を論じる。本作は三幕七場の劇部分と各幕冒頭におかれた三つの物語部分から成る独特の構成を持つ。Faulkner自身が、物語部分は“the contrapuntal effect” (FU 122)のために必要だと述べたのがきっかけで、その対位的構成が注目されてきた一方、語り手の特異性は、三人称であるが故に旧来のものとされ見過ごされがちである。物語論の手法で本作を分析したHugh M. Ruppensburgでさえ語り手の特異性を指摘するに留まり、その特異性の核たる問題点を見過ごしているし、特異性を生むFaulknerの語りの技法は未だ明らかにされていない。

先行研究は、本作の語り手の特異な点について、三人称の語り手でありながら登場人物の特徴もあると説明してきた²。この説明が正当であるのは明らかだが、しかし、このように説明することで中心とすべき問題がぼやけてしまう。三人称の語り手は物語世界外の存在である。物語世界内の存在である登場人物とは存在の水準が異なる。Ruppensburgが“A very tangible, self-conscious personality, he [the narrator] seems at times almost a character, as indeed he becomes in the third prose narrative....” (138)と指摘した事態は、語り手が物語世界内

の登場人物になるのを端的に意味しているのもあって、この語り手を単純には三人称の語り手と呼ぶことはできない。ここには、本作独自の語り手の問題が含まれている。

そこで、究明されるべきは、「三人称の語り手であり登場人物でもある」という語り手の特異性が、どのように実現されているのかを問う語り手の技法の問題となる³。本論は、この問題を語り手の物語構造上の位置を検討して論じる。検討の手掛かりとして、*Requiem for a Nun* 第一幕冒頭の物語部分、作品全 190 頁中の約 31 頁にあたる “The Courthouse (A Name for the City)” (以下、小説版) を本作出版前に雑誌 *Harper's* に掲載された同名の短編 “A Name for the City” (以下、短編版) と比較考察する。Faulkner は短編版を入念に改訂して小説版に利用した。両者の比較は、短編の語り手を小説の語り手にするために Faulkner がどのような工夫をしたかを知る手掛かりとなる。

本論に入る前に、本論で用いる用語の定義をしておきたい。語り手の分類と用語は研究者によって異なるが、本論では、自分の語る物語世界の外に位置するか中に位置するか、物語世界の登場人物か否かを判断基準とし、物語世界外に位置し、どの物語に対しても登場人物でない語り手を「三人称の語り手」、登場人物として物語内に存在し、その物語内で別の物語を生産する語り手を「登場人物兼語り手」と呼ぶ。登場人物兼語り手が物語を生産する時、物語構造は「入れ子式」となる。入れ子式物語構造において、最も外側に位置し、三人称の語り手が生産する物語を「第一次物語」、第一次物語世界内の登場人物が生産する物語を「第二次物語」と呼ぶこととする。

I 冒頭変更部分の分析：語り手のタイプ

小説版 (The Library of America 版で全作 190 頁中約 31 頁) を短編版 (*Harper's* で約 10 頁) と比較すると、三つの点に気づく。第一に、短編版の冒頭第一段落 (約 60 行) は大幅に削除・修正され、小説版第一段落の約 8 行に短縮されている。第二に、短編版の第二段落以降の残り約 9 頁分は、多少の変更が加えられた上で小説版の第二段落以降の約 18 頁分としてほぼそのまま借用されている。第三に、小説版の後半約 13 頁分は短編版にない書き下ろしである。本論は、冒頭変更部分、中盤借用部分、後半書き下ろし部分の三つに小説版を分け、短編版と比較しながら小説版の語り手の物語構造上の位置を論じていく。

冒頭変更部分を比較すると、Michael Millgate が、短編版については “in the story we discover that the narrator, though unidentified, must in fact be Charles Mallison”, 小説版については “the interchapters of the novel are narrated in terms of the conventions of third-person objectivity” と指摘したように (224), 大幅な変更により、小説版は短編版とは語り手のタイプが変わっているのが分かる。以下に、短編版と小説版の冒頭部分を引用し、比較してみよう。

“Experience,” Uncle Gavin said, “is not in the senses, but in the heart. [...]”
And as he—Uncle Gavin—grew older, he began to spend more and more of his time trying to prove this to me. I mean, he used to tell me the old tales about Jefferson and the county in order to explain something I had seen, or that he and I had seen together; now he began to tell them for their own sake, as though he himself had been there a hundred or a hundred and fifty years ago; [...].

Jefferson was not even Jefferson then. It was not even a town. It was a Chickasaw agency trading-post: a store, a tavern, a jail or calaboose, a half-dozen

log cabins set in a disorderly huddle in the middle of the wilderness domain which Ikkemotubbe, old Issetibbeha's successor, was ceding to the white men for land—peace, escape, whatever he and his people called it—in what was to be Oklahoma territory. [...] even the simple dispossession of Indians begot in time a minuscule of archive and record, not to mention the normal litter of man's ramshackle confederation against environment—that time and that wilderness. (短編版 200)⁴

The courthouse is less old than the town, which began somewhere under the turn of the century as a Chickasaw Agency trading-post and so continued for almost thirty years before it discovered, not that it lacked a depository for its records and certainly not that it needed one, but that only by creating or anyway decreeing one, could it cope with a situation which otherwise was going to cost somebody money;

The settlement had the records; even the simple dispossession of Indians begot in time a minuscule of archive, let alone the normal litter of man's ramshackle confederation against environment—that time and that wilderness; (小説版 475)⁵

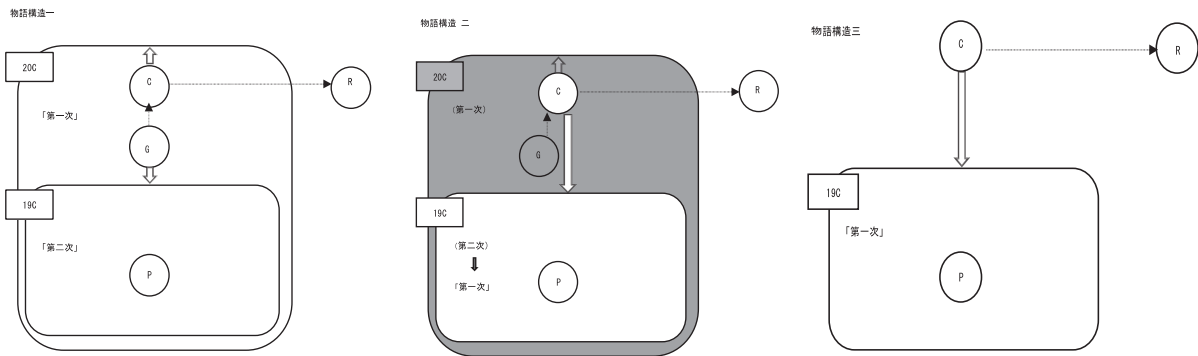
短編版は、“Experience,”⁶ Uncle Gavin said,”の一文から始まることで、語り手が Gavin Stevens の甥、すなわち、ここでは名前に言及されないが、Charles Mallison (Chick) であることが分かる。また、短編版の第一段落では、“I mean, he [Uncle Gavin] used to tell me the old tales about Jefferson and the county”と語られ、語り手 Chick が自らを一人称で指示している。短編版は、主要エピソード、すなわち、1830 年頃の Jefferson に起きた出来事が第二段落以降で語られる前に、冒頭第一段落で Chick が自らに一人称で言及して登場し、これから話すのが叔父 Gavin を情報源とする昔話であると語っている。この導入部分によって短編版は、小説版とはほぼ同じ物語言説の第二段落以降も、地の文を語っているのが登場人物 Chick であると理解できる。一方、小説版にはこの導入部分がなく、自らを一人称で指示する Chick のような登場人物は第二段落以降も登場しない。結果、短編版第二段落の引用文中六行目“even”以降と小説版第二段落の引用文中一行目“even”以降の物語言説はほとんど同じであるのに、短編版では語り手は登場人物兼語り手の Chick となり、小説版では三人称の語り手となる。

II 中盤借用部分の分析：物語構造上の位置①引用符

語り手が登場人物でもあると決定づけるのは、語り手の物語構造上の位置である。自ら語る物語世界内の存在である時、初めて、語り手は登場人物でもあると言える。短編版では、物語冒頭で自らを一人称で指示することで、語り手 Chick は自分が登場人物でもあることを明らかにしている。一方、小説版では、既に確認したように、短編版の冒頭部分が削除されてしまい、語り手が登場人物でもあるとは断言できなくなってしまう。しかし、小説版の中盤において、短編版からの借用にわずかに施された変更点を検討すると、小説版が、短編版とは異なる方法で、語り手を物語構造上、登場人物に位置付けていることが理解できる⁷。

ここで、手掛かりとして、短編版の物語構造を確認しよう（物語構造一、二、三参照）。図の中の○は登場人物、及び、物語の語り手と聞き手または読者（図中 R）を表す。実線の矢印は語り手と

聞き手の関係を示す。矢印の始点に語り手があり終点に聞き手がある。白抜きの矢印は、物語世界と物語世界の生産者である語り手の関係を示す。矢印の始点に語り手が位置し、終点に物語世界が位置する。二つの物語世界のうち、外側にある第一次物語世界は、推定1950年頃が描かれるもので、20世紀物語世界（図中20C）とする。内側にある第二次物語世界は、推定1830年代が描かれるもので、19世紀物語世界（図中19C）とする。



図「物語構造一」(以下, 図一)は、先に引用した短編版冒頭第一段落の物語構造を, 図「物語構造二」(以下, 図二)は第二段落以降の物語構造を示している。図一では, 地の文の担い手は Chick(図中 C)であり, 彼は読者を相手に自分の含まれる 20 世紀物語を語っている。Gavin (図中 G) は 20 世紀物語の登場人物として, Chick を相手に Peobody (図中 P) が含まれて自分は含まれない 19 世紀物語を語っている。20 世紀物語世界の登場人物としての Chick は Gavin の話の聞き手でもある。図二でも, Chick は地の文の担い手である。彼は読者を相手に, Gavin から聞いた物語として, Peobody が含まれて自分の含まれない 19 世紀物語を語っている。注目したいのは, 図二が示している第二段落以降で, 20 世紀物語世界の中で, 19 世紀物語を Chick に語る Gavin と, Gavin から 19 世紀物語を聞く Chick が描かれぬ点である。結果として, 第二段落以降では, Chick は, 20 世紀物語世界の登場人物としては, また, 読者に 20 世紀物語を語る登場人物兼語り手としては背景化し, 代わって, 読者に 19 世紀物語を語る語り手として前景化することになる。図では, 背景化された要素を灰色で示す。図二において, 背景化された要素を取り去ったのが, 図「物語構造三」である。図二において前景化した要素だけから見ると, 第二段落以降の物語構造は, 三人称の語り手が 19 世紀物語を第一次物語として語る物語構造に酷似していくことが分かる。

小説版の語り手の物語構造上の位置を検討する上で重要なのは, 図二で示した, 小説版とほとんど同じ物語言説で構成されている, 短編版第二段落以降の物語構造における語り手 Chick の位置である。図二において前景化された要素から見ると, 語り手 Chick は, 自らが語る第一次物語世界 (19 世紀物語世界) の外に位置する三人称の語り手のように見えている。しかし, そのように見えるのは, 本来の第一次物語世界 (20 世紀物語世界) が背景化し, Chick が, 本来の第一次物語世界 (20 世紀物語世界) の登場人物兼語り手としては背景化するからである。第一次物語世界 (20 世紀物語世界) と第二次物語世界 (19 世紀物語世界) の, 両方の語り手である Chick は, 本来, 第一次物語世界 (20 世紀物語世界) に対しては世界内に, 第二次物語世界 (19 世紀物語世界) に対しては世界外に位置しているのである。この考察結果は, 三人称の語り手とされてきた小説版の語り手にも, 登場人物兼語り手の資格がある可能性を示唆している。小説版において, 三人称の語り手が, 19 世紀物語世界を第一次物語世界として読者に向かって語っていると見えるとしても, この語り手を登場人物として中に含む, 本来の第一次物語世界としての 20 世紀物語世界が 19 世

紀物語世界の外にあるとすれば、小説版の語り手も、短編版の語り手 Chick と同じように、登場人物兼語り手の資格を得る。

この可能性の有無を検討すると、実際、中盤借用部分にある変更箇所には、物語構造上重要な意味を持つものがあることに気づく。それは、引用符の変更である。短編版では、登場人物の台詞は二重引用符で括られているが、小説版では、全て一重引用符で括られているのである。以下に、一例として、19世紀物語を描出する場面の中から、短編版と小説版で共通する、PeobodyとPettigrewの会話を引こう。

“Ratcliffe says your name’s Jefferson,” Peobody said.

“That’s right,” Pettigrew said. “Thomas Jefferson Pettigrew. I’m from old Ferginny.” (短編版 214)

‘Ratcliffe says your name’s Jefferson,’ Peobody said.

‘That’s right,’ Pettigrew said. ‘Thomas Jefferson Pettigrew. I’m from old Ferginny.’ (小説版 492)

二つの引用で注目したいのは引用符の違いである。PeobodyとPettigrewの台詞は、短編版では二重引用符で括られ、小説版では一重引用符で括られている。引用符の違い以外は、地の文も台詞も一語一句全く同じである。このように、短編版において地の文を語るChickが引用する登場人物の台詞は二重引用符で括られており、小説版では、地の文を語る語り手が引用する登場人物の台詞は一重引用符で括られている⁸。

Faulknerは、標準的には、一重引用符を、二重引用符で括った登場人物の台詞の中でさらにことばを引用する時に使う。実際、短編版では、Faulknerは、一重引用符と二重引用符の、この標準的使い分けに従っている。例えば、短編版冒頭のGavinの台詞““Experience,””(200)は、二重引用符で括られ、彼の台詞内の引用は、“‘Goodbye, Ma, and may the best man win’”(200)と一重引用符で括られている。このように、Faulknerは、短編版では、一重引用符を二重引用符の中での引用に当てる標準的な用法を使っていると言って良い⁹。この引用符の標準的用法を小説版に当てはめて考えると、小説版の物語部分で語り手が登場人物の台詞を一重引用符で引く時、この語り手は、物語構造上、二重引用符で括られる台詞を持つ登場人物と同じ水準に設定されていると言える。

以上のように、小説版における引用符の用法が独自なのは明らかであるが、その用法に重要な意味があると主張した研究は私の知る限りない。それどころか、私の主張を論拠不十分とする反論は直ちに予想される。短編版から小説版への引用符の変更は事実であるとしても、その変更はFaulknerの特別な意図はないのではないか、あるいは、語り手による地の文が二重引用符で括られていないという反論である。

これらの反論に対しては、第一に、Faulknerは、もともと引用符などの句読法に非常に神経を使う作家であり、特に名声が定まってからの後期作品では、自らの句読法に異常にこだわっている事実を論拠として挙げたい。具体的には、*Requiem for a Nun* 執筆中にRandom Houseの編集担当者Saxe Comminsに宛てた手紙で、Faulknerはインデントなどの文字以外の表現へのこだわりを示している¹⁰。また、一重引用符か二重引用符かの選択をFaulknerが意識的に行なっている事実もある。*Go Down, Moses* (1942)の“The Bear”では、五つのセクションのうち

第四セクションのみで Faulkner は登場人物の台詞を一重引用符で括っているし、*Requiem for a Nun* とほぼ同時期に執筆した *A Fable* (1954) のタイプ原稿には、一重引用符を二重引用符に Faulkner が赤鉛筆で修正している箇所を見いだせる¹¹。

第二に論拠としたいのは、*Requiem for a Nun* では、本来は二重引用符で括られるべき台詞を持つ登場人物、すなわち、劇部分の登場人物の台詞も二重引用符で括られていないという事実と、加えて、劇部分の登場人物の台詞中に引用されることばが一重引用符で括られているという事実である。一例として、劇部分において、20世紀物語世界の登場人物 Temple Drake Stevens が、息子の Bucky との会話を Gavin に伝える際の引用符の用法を確認しよう。

STEVENS

Well? This is the eleventh. Is that the coincidence?

TEMPLE

No. This is.

(she drops, tosses the folded paper onto the table, turns)

It was that afternoon—the sixth. We were on the beach, Bucky and I. I was reading, and he was—oh, talking mostly, you know—‘Is California far from Jefferson, mamma?’ and I say ‘Yes, darling’—you know: still reading or trying to, and he says, ‘How long will we stay in California, mamma?’ and I say, ‘Until we get tired of it’ [...]. (525)

Gavin Stevens を相手に発せられた Temple の台詞は引用符で括られていない。標準的な劇の台本のスタイルに則り、台詞の発話者の名前は、台詞の直前の行で中央寄せされた大文字によって示されている。また、Temple の台詞の中に引用された彼女の息子 Bucky と彼女の台詞は一重引用符で括られている。*Requiem for a Nun* では、本来は二重引用符で括られるべき台詞を持つ登場人物の台詞は二重引用符で括られず、登場人物の台詞内の台詞が一重引用符で括られるのである。

以上に示してきたように、Faulkner は気まぐれにではなく、意図的に、登場人物の台詞内に引用されたことばを括る意味で一重引用符を選択している。従って、小説版の物語部分で語り手が登場人物の台詞を一重引用符で引く時、この語り手は、物語構造上、標準的用法では二重引用符で括られる台詞を持つ劇部分の登場人物と同じ水準に設定されていると言えるのである。

Ⅲ 後半書き下ろし部分の分析：物語構造上の位置②時制

小説版における、物語構造上重要な短編版との違いは、小説版の後半書き下ろし部分にも見られる。20世紀物語世界に言及する際、小説版の語り手は短編版の語り手が使わない時制を使うのである。一般的に、物語世界は時代と空間で区切られるが、Jefferson を主要舞台とする *Requiem for a Nun* では、時代が物語世界を区切る重要な基準となる。語り手が20世紀物語世界に対して用いる時制は、語り手が自己をこの世界に対してどのような位置に置いているか、語り手の物語構造上の位置を確定する手掛かりとなる。

短編版の語りの現在は20世紀であるが、語り手が20世紀物語世界に言及する際に使う基本時制は過去形である。例として、以下の引用を検討しよう。

(overnight it [the settlement] was a town without having been a village; one day in about a hundred years it would wake frantically from its communal slumber in a rash of Rotary and Lions Clubs and Chambers of Commerce and City Beautifuls: a furious beating of hollow drums toward nowhere, but simply to sound louder than the next tiny human clotting to its north or south or east or west, dubbing itself city as Napoleon dubbed himself emperor, and defending the expedient by padding its census-rolls—a fever, a delirium in which it would confound forever seething with motion and motion with progress) (短編版 201) 下線は重迫による

ここで語り手は“one day in about a hundred years”について語っている。この“one day”とは、“from its communal slumber in a rash of Rotary and Lions Clubs and Chambers of Commerce and City Beautifuls”と描かれる20世紀物語世界を指す。この時、引用二行目と七行目の下線部で助動詞“would”が使われているのに注目したい。wouldはwillの過去形であり、過去における語り手の推量を表す。語り手は、まず過去を回想して、過去の19世紀物語世界の時点での、未来の20世紀物語世界を想像している。短編版では、語り手が20世紀物語世界に言及する時には、必ずこの用法の“would”が使われる。

以下は、短編版にはない、小説版の書き下ろし部分からの引用である。小説版の語り手が20世紀物語世界に言及する時に使う時制を検討しよう。

the courthouse centennial and serene above the town most of whose people now no longer even knew who Doctor Habersham and old Alec Holston and Louis Grenier were, had been; [...] every few years the county fathers, dreaming of bakhshish, ⁽¹⁾would instigate a movement to tear it [the courthouse] down and erect a new modern one, but someone ⁽¹⁾would at the last moment defeat them; they ⁽²⁾will try it again of course and be defeated perhaps once again or even maybe twice again, but no more than that. Because its fate ⁽³⁾is to stand in the hinterland of America: its doom ⁽⁴⁾is its longevity; like a man, its simple age ⁽⁴⁾is its own reproach, and after the hundred years, ⁽²⁾will become unbearable. (小説版 504-5) 下線は重迫による

ここで、語り手は、“the courthouse”を中心とした町の変化を、引用一行目に“centennial”とあるように、設立100年後、すなわち20世紀半ば（推定1930年）から、引用八行目から九行目にかけて“after the hundred years”とあるように、さらに100年後、すなわち21世紀半ば以降に到るまでの期間について語っている。引用中、四行目と五行目の二箇所の下線部（1）で使われる助動詞“would”は短編版と同じ用法である。小説版で注目すべきは、引用五行目のセミコロンの後、八行目の二箇所の下線部（4）で、語り手が現在形“is”を使っている点である。未来を意味する助動詞“will”（五行目と九行目下線部（2））や“is to”（七行目下線部（3））もあるが、これらは発話時の現在時点における語り手の推量を表し、時制としては現在形である。引用五行目のセミコロン以降、語り手は20世紀物語世界の時代を現在として描写しつつ、現在の20世紀物語世界の時点での、未来の21世紀以降の物語世界を想像している。このように、20世紀物語世界に対して、小説版では、短編版とは異なり、現在形が使われることがある。

以上に見てきたように、短編版の語り手は、20世紀物語について語る際、常に過去形を使う。

一方、小説版の語り手は現在形を使うこともある。このことは、小説版の語り手が、自ら生産する20世紀物語に含まれていることを意味する。通常、物語は過去形で語られる。語り手が過去形で物語を語る時、語り手はその物語の内容を過去のこととして捉えており、自ら語る物語世界の外に位置する。語り手が現在形で物語を語る時は、語り手はその物語の内容を現在のこととして捉えており、自ら語る物語世界の中に位置する。短編版では、語り手 Chick にとって単純に過去とは言えない、現在の20世紀物語世界に言及する時にさえ、19世紀物語の時代を基準と設定して過去を回想するように語っていく。一方、小説版の語り手は、現在の20世紀物語の時代を基準と設定し、この世界を現在のものとして語っていく。小説版の語り手は、20世紀物語世界に、短編版の語り手 Chick が使用しない現在形で言及することによって、自分が20世紀物語世界の中の存在であることを示している。それは、同時に、この語り手が、物語構造上、19世紀物語世界の外側の、本来の第一次物語世界の登場人物兼語り手であることを示しているのである。

結論 *Requiem for a Nun* の語り手の特異性

本論は、後期 Faulkner の語りの技法の実験の一例として、*Requiem for a Nun* の語り手について論じた。「三人称の語り手であり登場人物である」という、先行研究が指摘してきた本作の語り手の特異性がどのように実現されているのかを、語り手の物語構造上の位置の点から明らかにしてきたのである。検討の際、本作第一幕冒頭の物語部分“The Courthouse (A Name for the City)”と、本作出版前に雑誌 *Harper's* に掲載された同名の短編“A Name for the City”の比較を手掛かりとした。

小説冒頭部分は短編冒頭から大幅に変更され、語り手は、登場人物兼語り手から三人称の語り手へと、タイプが変わっているように見える。しかし、小説における加筆・修正に、一見三人称の語り手と見えた小説の語り手が、実は、物語構造上、登場人物兼語り手であると言える根拠を見いだすことができる。修正としては、本来登場人物の台詞を括るはずの二重引用符が一重引用符に変更されている。このことは、語り手が、物語構造上、劇部分の登場人物と同じ水準に位置していることを示す。加筆としては、語り手が20世紀物語世界に言及する際、短編の語り手が用いない現在形を使う表現がある。このことは、語り手が、19世紀物語世界の外の20世紀物語世界に対して、物語世界内の存在であることを示すのである。

本論の検討から、*Requiem for a Nun* において三人称で語る語り手が、物語構造上、登場人物兼語り手の位置に設定されていることは明らかである。一見、古典的とも見え、実験的要素がないとされてきた本作の語り手は、単純な三人称の語り手にはない特異性を Faulkner の実験的語りの技法によって与えられているのである。今後の課題として、なぜ、このような特異な語り手を Faulkner が必要としたのか、作品のテーマとの関係を論じる必要がある。この課題は、本論と密接な関係のある重要な問題であり、稿を改めて取り組む予定である。

謝辞 本研究は JSPS 科研費 JP17K02578 の助成を受けたものです。

* 本稿は、2019年10月5日に東北学院大学で開かれた日本アメリカ文学会第58回全国大会の研究発表「William Faulkner の語りの技法—*Requiem for a Nun* における特異な三人称の語り手—」を大幅に加筆・修正したものです。

注

¹ Faulkner は、1931年の11月2日付、University of Virginia の *College Topics* 掲載のイン

タビユーで, “In the future novel, or fiction [...] there will be no straight exposition, but instead, objective presentation, by means of soliloquies or speeches of the characters, those of each character printed in a different colored ink. Something of the play technique will thus eliminate much of the author from the story.” (LG 18) と語ったとされている。

- ² 例えば, Noel Polk は, “The third part begins at the top of pages 252 when the narrator suddenly, magically, begins to address the reader directly, a narrative strategy Faulkner uses nowhere else in his fiction” (162) と述べて, 本作の語り手が, Faulkner 作品中でも稀なことに, 三人称でありながら登場人物のように振るまうと指摘している。先行研究における *Requiem for a Nun* の語り手に関する議論の詳細は, 拙稿「*Requiem for a Nun* の語り手の特異性—短編 “A Name for the City” との比較検討から—」で論じたので参照されたい。
- ³ Ruppensburg は, 本作の「三人称であるが登場人物である」語り手を, 視点の問題として丁寧に分析している。
- ⁴ William Faulkner, “A Name for the City” *Harper’s CCI* (Oct. 1950). 以下, 短編版からの引用は全てこのテキストにより, 頁数は引用に続けて括弧内に示す。
- ⁵ William Faulkner, *William Faulkner: Novels 1942-1954: Go Down, Moses, Intruder in the Dust, Requiem for a Nun, A Fable*. New York: The Library of America, 1994. 以下, 小説版からの引用は全てこのテキストにより, 頁数は引用に続けて括弧内に示す。
- ⁶ 通例テキストからの引用は二重引用符で括られ, 引用中の登場人物の台詞は一重引用符で括られる。しかし, 本論は引用符の種類を問題とするため, 引用文中であっても, 原文の英語表記のままの引用符を用いる。
- ⁷ 短編版からの語り手のタイプの変更にかかわらず, 小説版の中盤借用部分は短編版第二段落以降の物語言説の大半をそのまま用いている。本稿は, わずかに施された変更点に注目して語り手の特異性を論じているが, 拙稿「*Requiem for a Nun* の語り手の特異性—短編 “A Name for the City” との比較検討から—」は, 大半の物語言説が変更されていない点に注目して語り手の特異性を論じたので参照されたい。
- ⁸ 第三幕物語部分には, 二重引用符で括られた登場人物の台詞が一箇所のみある (636)。
- ⁹ その他にも類例として, 短編版の “You could call that lock ‘axle grease’ on that Indian account,” he said. (214) が, 小説版では ‘You could call that lock “axle grease” on that Indian account,’ he said. (492) に変えられているのを挙げる事ができよう。
- ¹⁰ Faulkner は Saxe Commins に宛てた手紙の中で, 以下のように述べている。

The paragraph indentations, etc. for the narrative part should be consistent, if possible.

In Act 2 and 3, the narrative is one single sentence, no period until the end, each par. ends with ; , no indentation for the first word, Cap. letter.

Act 3, sent you today, is set up by me the same.

What do you think about setting Act 1 that way, no indentation except for the *dialogue* in quotes, each par. of narrative to begin with Cap letter, end with ; , no indent. unless the indent begins with ‘?’

Note re subtitle Act 2, attached to that galley.

This is a good piece. If I were only older, and had the big book behind me, I would be almost tempted to break the pencil here and throw it away. (SL 316)

¹¹ Louis Daniel Brodsky Collection of William Faulkner Materials, Special Collections and Archives, Southeast Missouri State University, Box 1605 参照。 *A Fable* で Faulkner が *Requiem for a Nun* の語り手と共通点の多い語り手を採用している点は、ここで指摘しておきたい。重要な共通点の一つとして、 *Requiem for a Nun* 同様に、 *A Fable* の語り手も登場人物の台詞を一重引用符で括り、台詞内の引用を二重引用符で括っている。

引用文献

Faulkner, William. "A Name for the City" *Harper's CCI* (Oct. 1950): 200-202, 204, 206, 208, 210, 212-14.

_____. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958*. (FU.) Ed. Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner. Charlottesville: UP of Virginia, 1995.

_____. *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner 1926-1962*. (LG.) Ed. James B. Meriwether and Michael Millgate. New York: Random House, 1968.

_____. *Selected Letters of William Faulkner*. (SL.) Ed. Joseph Blotner. New York: Random House, 1977.

_____. *William Faulkner Manuscripts 19 Requiem for a Nun* Ed. Noel Polk 4 vols. New York: Garland, 1987.

_____. *William Faulkner: Novels 1942-1954: Go Down, Moses, Intruder in the Dust, Requiem for a Nun, A Fable*. New York: The Library of America, 1994.

Millgate, Michael. *The Achievement of William Faulkner*. Athens: U of Georgia P, 1989.

Polk, Noel. *Faulkner's Requiem for a Nun: A Critical Study*. Bloomington: Indiana UP, 1981.

Ruppersberg, Hugh M. *Voice and Eye in Faulkner's Fiction*. Athens: U of Georgia P, 1983.

重迫和美「*Requiem for a Nun* の語り手の特異性—短編“A Name for the City”との比較検討から—」『比治山大学現代文化学部紀要』26号, 2020年3月掲載予定(2019年10月31日受理・印刷中).

平石貴樹『小説における作者のふるまい—フォークナー的方法の研究』松柏社, 2003.